

# 河口慧海

## 〈人物書誌大系44〉

高山龍三 編

A5・570頁 定価(本体18,000円+税) ISBN978-4-8169-2559-7 2015年9月刊行

### 没後70年にあたり 全業績をまとめた個人書誌の決定版

- 鎖国下のチベットに単身入国した仏教学者、日本チベット学の始祖、探検家としても知られる河口慧海(1866~1945)の初の本格的個人書誌です。
- 旅行記・仏教書・記録資料などの全著作、慧海について国内外の研究文献・批評・記事など3,800件を収録、人物像と全業績がわかります。
- 全ての文献には内容がわかる解説・解題を付けました。
- 「年譜索引」「著作索引」「著者名索引」付き。

**編者プロフィール 高山 龍三(たかやま・りゅうぞう)**

1929年大阪生まれ。大阪市立大学卒・同大学院博士課程中退、東京工業大学助手、東海大学助教授、大阪工業大学教授を経て、京都文教大学文化人類学教授を定年退職。チベット文化研究会会長。1958年以来ネパール、西および南アジア、ボルネオのフィールドワーク、主にヒマラヤ・チベットの民族誌研究、アジア文明論、近年は河口慧海の研究に従事。

著書『ヒト・文化・文明』『失われたチベット人の世界』『環境・人間・文化』『河口慧海一人と旅と業績』『展望 河口慧海論』『河口慧海への旅』、共編著『ヒマラヤ 秘境に生きる人びと』『アジアを見直す』『朝日小事典ヒマラヤ』『文化地理学』『ヒマラヤ名峰事典』、『川喜田二郎の仕事と自画像』、河口慧海『チベット旅行記』の校訂、『河口慧海著作集』の監修・編集、『河口慧海著述拾遺』の編集など。

**河口慧海(かわぐち・えかい) 1866-1945**

仏教学者、僧侶、探検家。大阪府堺市生まれ。1887年井上円了の哲学館に入り宗教、哲学を学ぶ。1890年東京・本所の黄檗宗五百羅漢寺の僧となる。仏教原典を求め、1897年インドに渡り、のち鎖国状態のチベットに日本人として初入国を果たした。帰国後、大正大学教授、東洋文庫研究員などを務めた。収集した原典資料などはすべて公共機関に寄贈され、仏教学の発展に大きく寄与した。著書に「西藏旅行記」「在家仏教」など。

**【目次】**

まえがき  
凡 例  
(特) 河口慧海の生涯(年譜)  
(監) 河口慧海の著作一覧  
☒ 1.著書  
☒ 2.論考  
☒ 3.新聞  
☒ 4.その他  
☒ 5.著作集論集と著述拾遺  
(企) 国内の著作にみる河口慧海  
(協) 国外の著作にみる河口慧海  
☒ 1.欧語表記著作  
☒ 2.中国語表記著作  
(労) 索引 ☒ 1.年譜索引  
☒ 2.著作索引  
☒ 3.著者名索引(国内の著作)  
☒ 4.著者名索引(国外の著作・欧語)  
☒ 5.著者名索引(国外の著作・中国語)  
あとがき

2016.8

お問い合わせは… **日外アソシエーツ 営業局**

**TEL.03-3763-5241(代) FAX.03-3764-0845**  
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 <http://www.nichigai.co.jp/>

■貴店名	注文書	河口慧海 〈人物書誌大系44〉	冊
		定価(本体18,000円+税) ISBN978-4-8169-2559-7	
		 9784816925597	

A004 『河口慧海師將來西藏品圖録』 東京美術学校校友会(編) 画報社 49p  
1904年3月18日  
慧海が持ち帰った仏像仏画など東京美術学校で展示したときの図録。「河口慧海著作集」別巻2 に収録。

A005 『西藏旅行記』 上・下 博文館 3+12+411, 11+455p 1904年3月23日、5月14日  
時事新報に連載の「比馬拉亞の山籠」1903年10月16日—11月1日、「世界の秘密國」1903年5月31日—10月15日を多少編集して刊行。大団円を入れて155回。中国語(本土・台湾)に収録。

A006 『生死自在』 博文館 3+4+11  
華族会館火曜会の演説をまとめたに述べたもの。生死の問題を求會趣意書をつける。「河口慧

A007 *Three Years in Tibet*. Theosophical Pustak Bhandar; Kathmandu, 1993. El Press; Thailand, May 2003. El Memphis, 2010. に復刻  
『西藏旅行記』の英訳、ジャバロイド教授校閲の英訳原稿は、ニー・ベザントの論い始めと援

全125章となる。

A043 『チベット旅行記』 全5冊 高  
1978年6月10日、②193p 7月  
⑤213p 10月10日  
全文全挿絵収録、改訂版・英訳  
る解説、全冊に地図を付す。〔

A044 『西藏旅行記』(「新選覆刻日本  
9月1日  
「日本の山岳名著」の2冊として

A045 『第二回チベット旅行記』 講談  
河口慧海の会刊(金の星社発売

A046 『河口慧海請来チベット資料図録  
(編) 東北大学文学部 357p  
「仏像」「仏画」「経帙板」「仏具  
の河口コレクションの図録。

A047 『東北大学所蔵 河口慧海請来チ  
本美術史研究室(監修) 俊成出  
前記図録に、上原昭一の刊記、  
三「河口慧海求道の旅と生涯」、  
田中公明「チベット仏教の歴史

1903(明治36)年

III 国内の著作にみる河口慧海

## 1903(明治36)年

E0036 「本邦僧侶西藏より遡る」『讀賣新聞』1903年1月22日(1)  
1903年1月、『讀賣新聞』に井上圓了の手紙が掲載される前日、慧海のチベッ  
ト脱出が報じられた。

E0037 井上圓了 1903「西藏探險僧河口慧海」『讀賣新聞』1903年1月23日(1)〔『中  
外日報』1021号 1903年1月30日、『加持世界』2巻2号36-38 1903年2月  
1日、「河口慧海師の西藏探險」『遠望現代』1巻2号34-35 1903年2月15日、  
『佛教文藝』1巻2号34-35 1903年2月15日 に転載〕

『チベット旅行記』(第143回)に書かれているように、慧海はインドのカル  
クッタで、師であり哲学館の創設者井上圓了に会った。そして慧海のダー  
ジリン行きに同行した。ダージリンでの滞在は1902年12月20日から23日  
であるが、井上の22日付けの手紙が「西藏探險僧河口慧海」として、翌年  
一月日本の新聞に載り(『讀賣新聞』、『中外日報』ほか)、『加持世界』誌ほ  
かにも載っている。慧海の履歴、チベットでの行動を簡潔に報じ、慧海の  
インド着後諸方の新聞紙にて紹介したため欧人の面会者が絶えないこと、  
慧海がチベットを脱出するに当たって、五重の関門を仙術で飛行したとい  
ううわさや、途上のチベット人が慧海に合掌、舌を出して最敬礼する状況  
を述べている。

E0038 「河口慧海氏西藏を脱す」『國民新聞』1903年1月23日(2)  
慧海のチベット入りはかつて報じたが、脱出、ダージリンに帰ったという  
短報。

E0039 「近事片々」『東京日日新聞』1903年1月24日(2)  
『読売新聞』の井上圓了の記事の翌日、『東京日日新聞』のコラム欄に、イ  
ンドに脱出した慧海を好漢と誉め、康有為、圓了にもふれた。

E0040 「河口氏の西藏脱走」『國民新聞』3942号2 1903年1月24日  
『讀賣新聞』前日掲載の井上圓了の書信の要約。慧海のチベット旅行を述べ、  
1904年1月10日、日本に帰ると書かれている。  
べた(英文p.iv-v, 日文p.6-7)。

E2387 高山龍三 2014「戦前の日本ネパール交流史」『50年の歩みと展望—日ネ  
50周年記念誌』13-19 日本ネパール協会 2014年12月1日  
日ネ50周年記念誌に高山龍三が「戦前の日本ネパール交流史」を寄せ、慧  
海について、最初の入国者(p.13)、ネパール留学生との交流(p.14)、再入  
国、再再訪(p.14)、ルンビニー、カピラワスト巡拝(p.14)、北方仏跡巡拝、  
カトマンズ訪問(p.15)を記した。

## 2015(平成27)年

E2388 高山龍三 2015「河口慧海に恋した女性たち」『チベット文化研究会報』39  
巻1号16-17 2015年1月20日  
高山は河口慧海に恋した女性、一人はツァーラン村の娘が戒を授かり、も  
う一人は旅に同行したカンパの娘に言い寄られたエピソードを述べ、ツァー  
ラン村の古い寺で、慧海と村人がいう木像と並ぶ女性像が発見されたのを  
紹介した。

E2389 本多勝一 2015「本多勝一の俺と写真(72) 日本で初めてチベットに入  
った河口慧海も登った道 狭くて急な尾根筋の幹線道路」『週刊金曜日』23  
巻8号50 2015年2月27日

## ■好評既刊

小川未明全童話〈人物書誌大系43〉 小笠裕二 編 A5・470頁 定価(本体18,000円+税) ISBN978-4-8169-2391-3 2012.12刊

野口富士男〈人物書誌大系42〉 平井一麥 編 A5・340頁 定価(本体18,000円+税) ISBN978-4-8169-2253-4 2010.5刊

吉村昭〈人物書誌大系41〉 木村暢男 編 A5・470頁 定価(本体18,200円+税) ISBN978-4-8169-2240-4 2010.3刊